博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　松浦寿夫

学位申請者　宮崎淳史

論　文　名　シュティルスキーの詩学―1930年代のチェコ・シュルレアリスム、絵画、写真、コラージュ、詩―

〈審査概要〉

本論文の公開審査は2017年12月4日17時30分から、本学事務棟中会議室で行われた。審査委員には、本学から篠原琢教授（主任指導教員）、山口裕之教授、また、外部から阿部賢一東京大学准教授、関口時正本学名誉教授をお招きし、主査は松浦寿夫が務めた。

審査では、まず最初に、学位申請者の宮崎淳史氏より、博士論文の概要が、きわめて詳細かつ明晰に提示され、その後、各審査委員からの講評と質疑応答が行われた。そして、審査委員会は全員一致で、本論文ならびに、最終試験での質疑応答を高く評価し、申請者に対して博士（学術）の学位を付与することが適当であるとの結論に達した。

〈論文概要〉

本論文はチェコ・シュルレアリスムを代表する芸術家の一人であるインジフ・シュティルスキーの多領域にわたる制作活動とその成果としての作品群作を研究対象として執筆された論文である。改めて指摘するまでもなく、シュティルスキーは近年その重要性が再発見され、徐々にその作品の展示の機会は欧米の美術館で増大しつつあり、また、日本ではすでに1930年代後半から部分的に紹介される機会があったとはいえ、本論文は日本語で書かれたこの芸術家に関する最初の体系的な著作であることを強調しておきたいと思う。この画期的な業績は、シュティルスキーというきわめて重要な作家の制作活動の全貌を初めて明らかにした点、チェコにおけるシュルレアリスムの様相に明確な視点をもたらしたこと、そして、シュルレアリスムそれ自体を可能にする条件をその理論的な次元で提示することに成功しており、今後、シュルレアリスム運動、チェコの前衛芸術、そしてシュティルスキーを研究しようと志す者が参照することが不可欠な基本的な文献としての重要性を持ち続けるだろう。その意味で、この学術的な価値を備えた本論文の書籍としての刊行が期待される。

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに
第一部　シュルレアリスムへの軌跡
　　I.　キュビスム、ポエティスム、アルティフィツィアリスム
　　II.　シュルレアリスムへ
第二部　シュティルスキーのシュルレアリスム作品
　　I.　解放されたリビドー――『エミリエ』におけるエロティックなテクストと挿絵
　　II.　ブルトンとバタイユの間で―シュティルスキーの絵画作品
　　III.　「もっとも日常的な現実の超現実的側面」－シュティルスキーの写真
　　IV.　夢のオブジェ化―シュティルスキーのコラージュ作品
第三部　シュティルスキーの詩学
　　I.　作品に通底する詩学―シュティルスキーの作品におけるフレームの効果
　　II.　失われた楽園を求めて
結
シュティルスキー略歴
参考文献
図版クレジット

本論文は、絵画、写真、コラージュ、挿絵、詩作品といった多様な媒体を駆使して制作活動を展開したシュティルスキーの多面的な側面を余すところなく検討しようする野心的な試みである。シュティルスキーの活動は長らく発表の機会を奪われていたため、この芸術家の存在自体が長らく忘却されていたが、1989年の共産党政権の崩壊以後ようやく国内外での展示の機会がもたれ、2007年にプラハで開催された大規模なこの画家の回顧展によって、ようやくこの芸術家の重要性が再発見されることになった。

とはい、シュティルスキーはチェコ・シュルレアリスムの代表的な画家である、といった辞書的な記述それ自体が曖昧さを内包しているように、まず、本論文の著者は、この画家の活動を位置づけるための文脈それ自体の検討から開始せざるをえなかったことは、必然的な手続きであったといえる。それゆえ、第一部ではまず第一にチェコにおける前衛的な芸術活動の形成とその理論的な次元の考察から開始し、とりわけ、前衛芸術運動の理論的な次元でもっとも重要な役割をはたしたカレル・タイゲとポエティスムの問題群の検討がなされることになる。そして、このポエティスムないし構成主義的な造型性に立脚した作品群の制作から始まったシュティルスキーの制作活動が、アルティフィツィアリスムの段階から、徐々に絵画外的な事物の様相が画面に表れ始める経過を経て、シュルレアリスム的な理念に移行していく過程を具体的ないくつかの作品の綿密な分析によって明らかにすることに本論文は成功している。

第二部では、シュティルスキーのシュルレアリスム期の制作の全貌を、いくつかの観点

から検討する作業が、明晰勝綿密に行われている。ここでは、主として、挿絵、絵画作品、写真、コラージュという駆使される媒体の相違に立脚した章立てを導入することにおいて、それぞれの媒体がもたらす作用力の相違に鋭敏に反応しながら自らの作品制作を基礎づけていくこの芸術家の思考を解き明かすことに著者は成功している。また、とりわけ、絵画制作の領域でのこの芸術家の活動の検討が、シュルレアリスムという理念それ自体をめぐるブルトンとバタイユとの論争的な状況で提起された問題群を再検討するうえで重要な視点を提供することに成功している。

シュティルスキーのシュルレアリスム的な作品群を、用いられる媒体の相違に着目して分析作業を展開した第二部に対して、第三部は多様な表れを示すシュティルスキーの作品群に通底する制作原理を詩学という語で提示し、この詩学の様態を明らかにすることが試みられている。この部分で、とりわけ強調されている点は、何が描かれているのか、あるいは描かれた対象の担う象徴的な意味は何かが問われるのではなく、様々な事物、あるいはその画像を内包する容器、フレームに注目し、この容＝フレームの形成にこそ、シュティルスキーの詩学を根底的に支える原理が存在することを、きわめて説得力のある論理展開で示すことに著者は成功している。また、《出生外傷》と題された油彩画作品を緻密に分析しつつ、精神分析学の重要な理論家オットー・ランクの議論を参照し、「暗い部屋」としての「容器＝フレーム」を子宮と象徴的に連結し、さらに、この容器＝子宮という観点から、部屋の奥まった空間にがらくたが内包される状態に「幼少時代の楽園」と形容したシュティルスキーの思考と制作に、箱＝容器＝子宮＝喪失した楽園という意味連関の網の目を構想したうえで、シュティルスキーの思考と制作を「喪失した楽園の探求」と提示する結論に至った。

〈審査の経緯と審査結果〉

最終審査では、各審査委員からきわめて高い評価と同時にいくつかの問題点が指摘された。指摘された問題点は大きくいって以下の二つの点に集約される。

シュティルスキーの制作活動が書き込まれるチェコの前衛芸術運動の諸側面の検討が必ずしも十分とはいえない点。もちろん本博士論文はシュティルスキーの制作活動をその全体性において捕捉しようする試みであるがゆえに、チェコの前衛芸術の運動を総体的に記述することを目的としているわけではないが、チェコにおけるシュルレアリスム運動の形成が、それに先行するポエティスムの芸術理念に対して、どのような断絶を画したのか、あるいはどのような連続性を備えていたかの検討にいま少し検討を加えるべきではなかっただろうか。とりわけ、カレル・タイゲの思考と実践への検討をさらに深めるべきではなかっただろうか。また、チェコのシュルレアリスム運動の記述に際して、シュティルスキーとトワイヤンが前景化されるが、必ずしもこの二人だけでこの運動の展開を説明できるわけではない。

本博士論文の題名および、第三部の題名に表れる「詩学」という語の使用に関して、明確な定義を記載しておくべきではなかっただろうか。とりわけ、言語を媒体とすることのない作品群を記述するに際して、あえて「詩学」という概念を用いるとすれば、それが制作学、いわば制作を可能にする条件の理論的考察という意味を帯びるのであれば、その点をあらかじめ指示しておくべきではなかっただろうか。また、この「詩学」という概念こそが、カレル・タイゲをはじめとするチェコの前衛芸術の理論的な水準でもっとも重要な概念であったのだから、改めてこの概念についての検討を付け加えることが必要であると考えられる。

このような問題点の指摘と質問に対して、宮崎淳史氏はきわめて明晰に返答し、改めて著者が自らの研究対象ならびにこの対象が挿入される文脈に関して、該博な知識を有し、またきわめて明晰な思考を展開しうることが明らかになった。また、これらの指摘に対して宮崎氏はきわめて誠実に受け答えし、今後の研究に反映させる意図を率直に表明した。

以上のように、いくつかの不備は指摘できるとしても、宮崎淳史氏の本論文は、日本語で書かれた最初のシュティルスキーの包括的な研究であり、そのきわめて高い学術的価値は疑いようもなく、今回の審査での指摘を参考にして、直ちに書籍として刊行されることが望まれる。また、本博士論文はシュティルスキー研究として卓越しているばかりでなく、この枠組みを超え出るいくつもの注目すべき主題の提起にも成功している。とりわけ、第三部で展開された容器・フレームをめぐる問題群はモダニズム芸術の多様な領域に展開できるきわめて重要な問題群の明晰な提示といっても過言ではない。この点でも、今後、著者がさらに自らの研究を深化させていくことを十分に期待することができる。

以上の点で、審査委員会は論文審査および最終試験の結果から、全員一致で、本論文がきわめて高度な学術的貢献であると判断し、宮崎淳史氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。